



# 仁井田



とは「柿木山村」といった。正確にいえば旧柿木山村の一部ということになる。現在の「仁井田」と「本田(ほんでん)」を併せた地域が柿の木山村であった。そのことから推測できるが、現在の仁井田は新田開発(江戸初期)をした地域である。

1815年に編纂された地誌(II)ある地域について自然・人文両方面から研究・記述した書物。郷土誌などの類(デジタル大辞泉より)である「南路志」によれば「柿木村」とあり、また、戦国期の地検帳では「柿山村」とも「柿木山村」とも記されている。高知道・四万十町中央インターチェンジのある平串から国道56号(中村街道)を久礼方面へ。東又方面へ行く県道52号との三叉路を過ぎると間もなく右手に洋菓子店があり、この辺りから仁井田ということになる。北は江ノ川までである。この洋菓子店のあるところに、国道と別れて斜めに入っていく道がある。この道が旧中村街道で、500mくらいではあるが、なるほどその昔は栄えたのであろうという趣がある。

戦前、この旧街道に豪商があったそう。その豪商は、もとは東川角で酒造業を始め、しばらくしてこの仁井田に移り、その後は醤油作り、肥料の販売、さらにはハイヤー事業や運送業まで手を広げていた。しかし、戦

争が激化する頃になると国家統制が厳しくなり、あらゆる物品の生産、流通が思うようにならず、事業は縮小・撤退せざるを得なくなっていたのだという。

また、幕末の時代には勤王の志士を目指した者もいた。東又・弘見地区で登場した「与津時屋清次」である。1832年、与津地に生まれた清次は、幼少の頃に父親とともに柿の木山村に移り住み、ここで魚の行商をして暮らしていた。1853年、清次が20歳の時に浦賀沖にペリーが来て、世の中は大騒ぎになる。清次は相撲がめつぼう強く、近隣に敵なしと言われていたのだが、さらに弘見村の道場に通い、剣術の修行も積むようになる。勤王の志士を目指したのである。その後の清次の運命は、弘見村の紹介の回に記した通りである。



ハイヤー事業の写真が残っている

(11月30日)		人口	前月比	出生	死亡	転入	転出	適正值(mg/l)		12月12日	
町のうごき	男	8,420	-22	男 3	20	7	12	リン酸	≤ 1.0	0.103	
	女	9,417	-24	女 4	21	6	13	硝酸	≤ 0.5	0.21	
	計	17,837	-46	計 7	41	13	25	アンモニウム	≤ 5.0	0.231	
	世帯数	8,634	-8					アニオン活性剤	≤ 1.0	0.75	
	窪川地域	12,510人		大正地域	2,558人		十和地域	2,769人	化学的酸素要求量	≤ 10.0	5.362

四万十川の  
水質状況

調査：大正(吾川)  
資料：四万十高校自然環境部